

音 楽 科



【授業改善に向けて】	音楽	1
【学習指導要領改訂の趣旨を生かした音楽科の実施ために】	音楽	2
【実践事例1】	音楽	3
第5学年 題材名 日本と世界の音楽に親しもう		
【実践事例2】	音楽	7
第6学年 題材名 和音の美しさを味わおう		

< 音楽科 >

【授業改善に向けて】

1 主体的・対話的で深い学びについて

音楽科における主体的・対話的で深い学びを実現させるためには、子どもが音楽的な「見方・考え方を働かせた学習」すなわち「音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素とその働きの視点でとらえ、音や音楽を、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付ける学習」に取り組むことが必要である。授業改善にあたっては、上記で述べたことを大切にするとともに、次のような学びの視点を踏まえて実践に取り組んでいきたい。

(1) 主体的な学びの視点

体を動かす活動を取り入れるなどして、子どもが音楽のよさを感じ取れるようにして、音楽によって喚起されるイメージや気持ちの変化に気付かせることが重要である。このことが、イメージや気持ちの変化を喚起させる要因となった音楽的な特徴に気付く原動力となり、音楽表現への見通しをもつことにつながる。また、音楽表現を工夫したり、音楽のよさを味わって聴いたりする過程でもったイメージや気持ちの変化を振り返り、音や音楽が自分の気持ちにどのような影響を及ぼしたかを考えることが学んだことの意味や価値に気付くことになり、次の学びにつながっていく。

(2) 対話的な学びの視点

表現及び鑑賞の学習過程において、「見方・考え方」を働かせて、互いに気付いたことや感じ取ったことなどについて交流し、音楽的な特徴について共有したり、感じ取ったことに共感したりすることが重要である。音を通して友達と交流し、自分なりの考えをもち、音楽表現や鑑賞の学習を深めていく過程に学習としての意味がある。

(3) 深い学びの視点

子どもが音や音楽に出会う場面を大切に、「見方・考え方」を働かせて、一人一人が音楽と主体的に関わることができるようにする。そのために、聴き取ったことや感じ取ったことを言葉や体の動きなどで表したり比較したり関連付けたりしながら、音楽との一体感を味わったり要素の働きや音楽の特徴について友達と共有・共感したりする活動を位置付けるようにする。

2 授業改善の視点

<視点1> 学習が深まった子どもの姿を描いた指導計画の工夫

- 指導過程における主体的・対話的で深い学びの姿の明確化
- 表現活動や鑑賞への必然性や必要感が生まれる教材の配列や働きかけの工夫
- 自己の学習状況や課題を明確にする学習カードの活用

<視点2> 音楽表現へのあこがれをもたせ、子どもの思いを高める指導の工夫

- 楽曲との出会わせ方の工夫
- 学びの意欲が持続する魅力的な教材の工夫・開発
- 音や音楽のイメージや思いの可視化の工夫

<視点3> 音を通した高め合いの工夫

- 音を通した交流の場の設定
- 発表の機会や場の工夫
- イメージや思いの共有化

【学習指導要領改訂の趣旨を生かした音楽科の実施のために】

1 移行措置の内容

(1) 小学校音楽科の移行措置は

- ① 学習指導要領の全部又は一部について実施できること
- ② 歌唱共通教材については、第1学年から第4学年までは4曲すべてを取り扱うこととし、第5学年及び第6学年は4曲中3曲を含めて取り扱うこと

(2) 新学習指導要領の全部または一部について実施する場合の留意事項

- ① 全部または一部を先行して実施できるとはしているが、歌唱共通教材については、必ず新学習指導要領の規定によること
- ② 表現活動において、現行で5・6学年に位置付いていた「我が国の音楽」に関する内容が、3・4学年からの内容に位置付いていること

2 教育内容の主な改善点

(1) 改訂の基本的考え方

- ① 感性をはたらかせ他者と協働しながら音楽表現を生み出す、音楽を聴いてよさを生み出す
- ② 音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める
- ③ 郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるよう和楽器を含む我が国や郷土の音楽学習の充実を図る

(2) 「目標」の改善

- ① めざす資質・能力＝生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力
- ② 学習内容の三本柱

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 知識・技能の習得・ 思考力、判断力、表現力等の育成・ 学びに向かう力、人間性等の涵養 |
|--|

- | | |
|----|--|
| 以前 | <ul style="list-style-type: none">・ 興味・関心・意欲、態度や習慣・ 基礎的な表現の能力・ 基礎的な鑑賞の能力 |
|----|--|

- ③ 音楽的な見方・考え方を働かせる

(3) 「領域内容」の改善（明確化）

- ① A「表現」（歌唱、器楽、音楽づくり）＝知識、技能、思考力・判断力・表現力等
- ② B「鑑賞」＝知識、思考力・判断力・表現力等

(4) 学習内容、学習指導の改善・充実

- ① 「知識」「技能」に関する指導内容の明確化
- ② [共通事項]の指導内容の改善
 - ・ アの事項 ＝ 思考力・判断力・表現力等
 - ・ イの事項 ＝ 知識
- ③ 言語活動の充実
 - ・ 配慮事項 ＝ 音や音楽、言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置づける
- ④ 「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実
 - ・ 新：和楽器を第3学年から（これまででは5年から）
 - ・ 新：音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器演奏の仕方

【実践事例1】第5学年 題材名 日本と世界の音楽に親しもう

1 題材の目標

- 日本と世界の国々の音楽に興味・関心をもち、それぞれの音楽のよさを理解して、様々な声による音楽を聴く学習や、箏を演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。
(音楽への関心・意欲・態度)
- 日本と世界の国々の音楽のよさや、声や楽器の響きの美しさを味わい、それらの特徴を感じ取って聴くことができる。また、箏ならではの楽器の特性を生かして、簡単な節をつくることができる。
(音楽表現の創意工夫)
- 日本の旋律のもつ特徴や美しさを感じ取りながら歌ったり、音程の高低を聴き分けて箏の調弦をするとともに、箏の基本的な奏法を知り、響きを味わいながら演奏することができる。
(音楽表現の技能)
- 箏や尺八の音色や日本の旋律のもつ美しさを感じ取りながら聴いたり、世界の国々の音楽のよさや面白さを感じ取りながら聴いたりしている。
(鑑賞の能力)

2 題材の展開にあたって

本学級の児童は、音楽への興味・関心が高く、朝の会で歌う歌声も元気いっぱい、休み時間にも友達と音楽CDを聴きながら口ずさんで楽しんでいる。

授業では、歌ったり楽器を演奏したりすることは好きだが、技能が伴っていない実態がある。なかなか2部合唱ができなかったり、合奏がばらばらになってしまったりしてきた。1学期の「いつでもあの海は」の2部合唱や「リボンのおどり」を合奏した際も、楽しんで表現することはできたが、微妙な音高のずれやタイミングのずれがあり、「なんだか合わない」とつぶやき、「もっときれいに合わせたい」と感じていたが、そのずれが何であるのかはとらえきれていなかった。

以上のような、これまでの児童の学びの姿や思いから、微妙な音高をとらえたり、音楽表現にはもっと広がりがあることに気付かせたいと考えた。そこで、柱を動かして行う箏の音合わせ(調弦)や、どの糸を弾いても日本的な音楽になる箏を用いた表現活動を中心に学習を進めていく中で、音高のずれに気付いたり、西洋的な音楽だけでなく日本の伝統的な音楽の中にも、美しさや奥深さがあることに気付いたりすることができるように、歌唱と鑑賞、器楽合奏、さらに音楽づくりの教材を組み合わせて設定した。

〈視点1〉学習が深まった子どもの姿を描いた指導計画の工夫

- 指導過程における主体的・対話的で深い学びの姿の明確化
歌唱教材を最初に設定し、日本古謡「子もり歌」や「さくらさくら」を歌う活動に取り組むことで、日本の音楽への興味・関心を高めていく。さらに、「春の海」の鑑賞に取り組むことで、日本の音楽の旋律のよさや響きの美しさを感じるとともに、和楽器演奏への意欲を高めることができるようにする。
- 表現活動や鑑賞への必然性や必要感が生まれる教材の配列や働きかけの工夫
箏の演奏や楽器の特徴を生かした音楽づくりを行い、我が国の音楽表現へたっぷり浸らせる。その上で、世界の様々な国の声による音楽にふれ、音楽表現の多様性や広がりを感じさせ、音楽を愛好する心情を深めていく。

〈視点2〉音楽表現へのあこがれをもたせ、子どもの思いを高める指導の工夫

- 楽曲との出会わせ方の工夫
箏曲作曲家宮城道雄について、また箏や尺八などの和楽器について知ること、日本の音楽のよさや特徴に気づき、これまで学んできた西洋的な音楽からさらに音楽の世界を広げていこうとする意欲を高めていく。
- 学びの意欲が持続する魅力的な教材の工夫・開発
12面の箏を準備し、実際に箏にふれる機会を多くして演奏活動や音楽づくりの活動を行うことで、体験を通して箏の響きの美しさや楽器の特徴を学ぶことができるようにする。

〈視点3〉音を通した高め合いの工夫

- 音を通した交流の場の設定
 箏の調弦や箏による「さくらさくら」の演奏に、友達と協力して取り組むことで、音楽に対する感性をより高めていくことができる。
- イメージや思いの共有化
 1面の箏を2名で使用し、互いに音を通してアドバイスし合うように働きかけることで、音楽活動の楽しさを味わうことができるようにする。

3 題材の指導計画（総時数8時間）

次	時	主な学習活動・内容	評価規準	授業改善の視点
一	1	「子もり歌」の曲想を感じ取るとともに、2つの旋律の感じの違いを味わって歌う。	旋律の特徴を感じ取り、曲想を生かした表現で歌うことができる。〈技能〉 日本の音楽に興味・関心をもって、歌う学習に主体的に取り組もうとしている。〈関心・意欲・態度〉	旋律の比較をしながら歌うことで、表現活動や鑑賞への必然性や必要感が生まれる教材の配列や働きかけの工夫 〈視点1〉
二	2	「春の海」を鑑賞し、箏と尺八の音色に親しむとともに、箏と尺八の音色や旋律の関わり合いに気を付けて聴く。	箏と尺八の音色や旋律を聴き取り、二つの楽器の関わり合いや旋律の反復、変化が生み出すよさや面白さを感じ取りながら、曲想の変化や曲の構造を理解して聴くことができる。〈鑑賞〉	鑑賞後に箏の実物にふれる場を設けるという楽曲との出会わせ方の工夫 〈視点2〉
三	3	「さくらさくら」の曲想を感じ取って歌うとともに、箏の基本的奏法や楽器の仕組みや歴史を知る。	日本古謡の旋律のもつ美しさを感じながら歌うとともに、日本の音楽に興味・関心をもち、箏でその音楽を表現したいという意欲を高めている。〈関心・意欲・態度〉	箏による「さくらさくら」の教師の範奏を聴くことで、学びの意欲と教材の魅力を高めていく工夫 〈視点2〉
さ	4	箏を調弦したり、基本的な奏法を確認したりしながら「さくらさくら」を演奏する。	音程を聞き分けて箏を調弦し、基本的な奏法を理解して、箏を演奏することができる。〈技能〉	調弦したり互いの演奏を聴き合ったりする音を通した交流の場の設定 〈視点3〉
く	5			
ら	6	「さくらさくら」の旋律に合う簡単な節を、箏の特徴を生かしながら友達と協力してつくる。	日本の旋律のもつよさや、箏の響きの美しさを感じながら、日本の音階の特徴を生かして旋律に合う飾りの節をつくることことができる。〈創意工夫〉	ワークシートの活用により、音や音楽のイメージや思いを可視化する工夫 〈視点2〉
本	7	「さくらさくら」を前時につくった旋律を重ねて合奏するとともに、日本の音楽や楽器の音色のもつ美しさを味わう。	旋律に合った節を旋律を重ねて演奏することで、日本の音楽や楽器の響きの美しさを味わうことができる。〈創意工夫〉	日本の音階の特徴を生かした合奏による音を通した交流の場の設定 〈視点3〉
時				
四	8	「世界の国々の音楽」を聴き、様々な国の歌声や歌い方による違い、それぞれの音楽の特徴やよさを味わう。	我が国や世界の国々の音楽に興味・関心をもち、それぞれの音楽のよさを味わってして聴く学習に主体的に取り組もうとしている。〈関心・意欲・態度〉	表現活動や鑑賞への必然性や必要感が生まれる教材の配列や働きかけの工夫 〈視点1〉

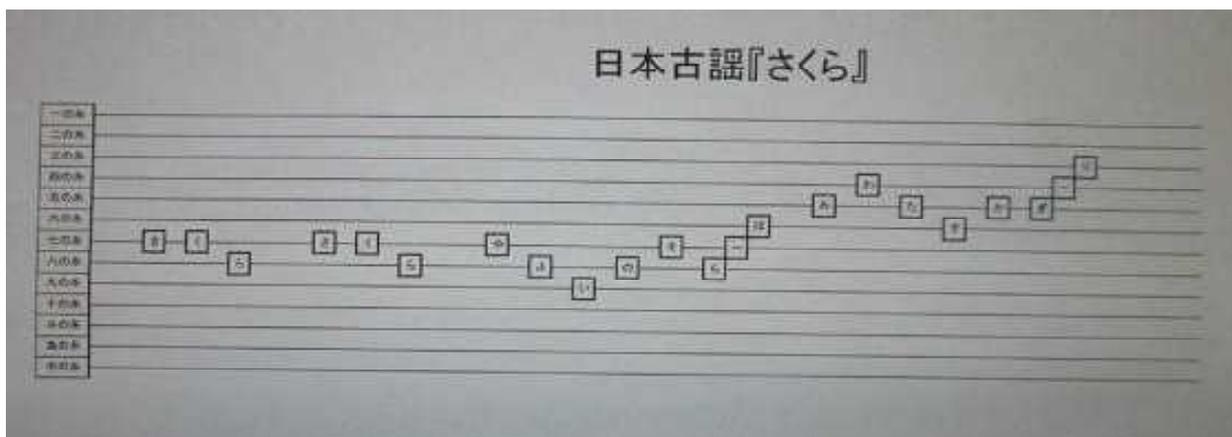
5 実践の考察（成果：○ 課題：●）

〈視点1〉学習が深まった子どもの姿を描いた指導計画の工夫

- 日本の音楽の導入として歌唱教材を用いたことで、何となく聞いたことがあるという馴染み易さとその旋律のもつ素朴な美しさにあこがれをもたせることができた。そこで鑑賞の活動をすることで、日本の音楽の歌唱と器楽の融合による広がりを感じることができた。この流れによって、その後の箏での「さくらさくら」の演奏にスムーズに移行することができた。
- 教師としては「子もり歌」「さくらさくら」はほぼ全員、「春の海」にしても7～8割の児童は知っている（聞いたことがある）と予想していたが、想定したよりも知っている児童はとてもなく、補助教材としてわらべ唄や宮城道雄についての資料を用いることとなった。児童の幼児期の音楽経験の不足があらためて浮き彫りとなった。

〈視点2〉音楽表現へのあこがれをもたせ、子どもの思いを高める指導の工夫

- 児童の直接体験の機会をより多くしようと箏を12面準備し、2人に1面という場の設定を行うことにより、一人一人がたつぷりと箏という楽器にひたることができた。それはさらに、児童の主體的な活動への意欲を引き出すことへとつながっていった。
- 教師自作の「さくらさくら」の絵譜を準備し、自由に書き込ませることで、互いの意見を交流したり、音楽づくりをしったりする活動の助けとして大いに役立った。



【教師自作の絵譜】

- 教師が想定していたよりも、児童の西洋的な音楽へのこだわりが強いためか、日本の5音の音階のよさや、和楽器の響きの美しさを感じることをできない児童がいた。響きに関しては、箏の数が多くあつて、教室や総合活動室などあまり音響が良くない場所で授業を行ったことも影響した。特別教室や体育館等の音響効果が期待される活動場所について十分配慮することが大切である。

〈視点3〉音を通した高め合いの工夫

- 箏の授業では、毎回最初に友達と協力し合いながら調弦をする時間を設定した。徐々に微かな音のずれにも気付くことができるようになり、互いに「ちょっと低いよ」「少し高いんじゃないかな？」などと、隣のペアなどとも自然に交流して助け合う姿が見られた。
- 「さくらさくら」の飾りの節づくりに取り組んだ時には、普段の音楽の授業では技能面で苦手意識をもって活動に消極的だった児童も、箏という楽器の特性を生かして生き生きと活動する姿が見られた。
- 今回は12面の箏で、2人に1面という恵まれた状態をつくることができたが、各小学校の楽器保有の現状を考えると楽器の準備はなかなか難しい。また、本題材では、箏の数の多さや響きの関係を考慮すると、どこで授業を行うと良いのか、12面の箏の並べ方はどのようにするとより効果的な指導ができるのかななどの課題が明らかになった。（文責 油井敏郎）

【実践事例2】第6学年 題材名 和音の美しさを味わおう

1 題材の目標

- 和音の響きや移り変わりに興味・関心を持ち、歌唱や合奏や音楽づくりの学習に、主体的に取り組もうとしている。(音楽への関心・意欲・態度)
- 和音やその移り変わり等を聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、歌い方や演奏の仕方に思いや意図をもっている。(音楽表現の創意工夫)
- 和音の響きの変化を感じ取りながら、各声部の歌声や楽器、全体の響き、伴奏を聴いて合唱・合奏したり、和音に含まれる音を用いてまとまりのある旋律をつくったりする。(音楽表現の技能)
- 和音やその移り変わり等を聴き取り、和声の響きの違いや音のバランスを感じ取り、楽曲全体にわたる曲想を味わいながら聴いている。(鑑賞の能力)

2 題材の展開にあたって

本学級は、何事も素直に努力する児童が多く、音楽科の学習に対しても意欲的に取り組むことができる。個人差はあるが、歌を歌うことも楽器を演奏することもできるようになるまで進んで練習する姿が見られる。反面、受け身な姿勢が見られる。学んだことを次の学習に活かしたり、「なぜかな」と問いをもって疑問を解決しようとすることに苦手意識を感じている児童が多い。また、音楽の技術的な完成度を求めるあまり、その完成するまでの過程に目を向けることが疎かになってしまうこともある。

児童はこれまでの様々な活動を通して、ハ長調・イ長調のⅠ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅴ₇の和音の響きや旋律や音が重なり合うきれいな響きを感じ取る学習をしてきた。和音の美しさを感じ取ることはできたが、様々な和音の違いを正確に感じ取ることでできる児童は数名であった。そこで本題材では、合唱を通して和音の響きの美しさを味わったり、器楽合奏を通してイ短調の和音の響きやその移り変わりを感じ取ったりと、題材を通して和音の変化を意識した学習を展開する。また、和音に含まれる音を使った旋律づくりを通して、和音の響きを味わいながらまとまりのある旋律をつくる力も育てていく。合唱・器楽合奏・旋律づくりを通して、和音の変化を感じ取り、その響きの美しさを味わわせていきたい。

〈視点1〉学習が深まった子どもの姿を描いた指導計画の工夫

- 指導過程における主体的・対話的で深い学びの姿の明確化
題材の第1次では合唱、第2次では合奏、第3次では旋律づくりと、段階を踏んで和音について考えさせる。合唱、合奏で学んだことを旋律づくりに生かすという流れにする。旋律づくりでは、つくった旋律が合唱「星の世界」や合奏「雨のうた」にも通用するのかを問い、和音の変化を感じ取り、その響きの美しさを味わうことを発展的に活用させながら取り組ませる。

〈視点2〉音楽表現へのあこがれをもたせ、子どもの思いを高める指導の工夫

- 学びの意欲が持続する魅力的な教材の工夫・開発
児童一人一人に「問い」をもたせる。題材の導入時に共通テーマを決め、例えば「和音を美しく響かせるには、どうしたらよいか。」などとし、合唱ではどうか、合奏ではどうかと考えさせる。共通テーマ「和音を美しく」を通して、音のバランスや和音の響き、旋律の重なり方などを児童の考えから引き出し、「音の実験」と称した音を使った学び合いをさせていく。旋律づくりでは、「みんなのつくった旋律が伴奏とよく合うのはなぜか」を問い、和音の音を使った旋律の有用性に気付かせていく。
- 楽曲との出会わせ方の工夫

合唱「星の世界」ではまず歌詞から情景を考えさせる。いくつかの星空のイラストや画像を提示し、「どれがこの曲のイメージと合うか」を問う。合奏「雨のうた」では範奏を聴き「どんな降り方をしているか」を考えさせる。「どしゃ降り」「しとしと」「天気雨」など雨の言葉を提示し、「どれがこの曲のイメージと合うか」を問う。なぜそう思うのか、児童に考えを出させながら曲想や共通事項を引き出して整理し、和音の学習へとつなげていく。

〈視点3〉音を通した高め合いの工夫

○ 音を通した交流の場の設定

話し合いでは児童のつぶやきやうなずきなどをもとに意図的指名をし、全体に問い返したりつなげたりすることにより、互いに伝え合いながら自分の考えを広げていくことができるようにする。教材と共通事項との関わりに着目している子どもを取り上げたり、違う考えの子どもの視点を与えたりすることで、協働した学び合いを通して理解を深めさせていく。その際、必ず「音の実験をしよう」「どんな音（歌い方）（弾き方）（叩き方）だとより良いか」と投げかけ、音を意識させていく。

3 題材の指導計画

次	時	主な学習活動・内容	評価規準	授業改善の視点
一 星 の 世 界	1	旋律の動きに気を付け、伴奏の響きを感じ取りながら主な旋律を歌う。	各声部の歌声や全体の響きに興味・関心をもち、自分の声を調和させて歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 〈関心・意欲・態度〉	視点を与えたり視覚的な資料を提示したりしながら楽曲と出会わせる方法 〈視点2〉 自己の学習状況や課題を明確にする学習カードの活用 〈視点1〉
	2	響きを確かめながら2と3のパートを歌う。	歌声の重なり、和音やその移り変わり、音楽の縦と横の関係を聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、歌い方を工夫して、より美しい響きを自ら求めている。 〈創意工夫〉	音の実験での歌を通したイメージや思いの共有化 〈視点2〉 歌を通した交流の場の設定 〈視点3〉
	3	主な旋律とのバランスに気を付けながら互いの声を聴き合って合唱する。	互いの歌声を聴き合いながら、バランスに気を付け、友達の歌声と溶け合うように歌っている。 〈技能〉 主旋律を生かすように音量のバランスを感じ取りながら聴いている。 〈鑑賞〉	音の実験での歌を通したイメージや思いの共有化 〈視点2〉 グループ合唱にて音を通した交流の場の設定 〈視点3〉 グループごとの発表の機会や場の工夫 〈視点3〉
二 雨 の う た	4	短調と長調との響きの違いに気を付けながら曲の感じをつかみ、主な旋律と副次的な旋律をリコーダーで演奏する。	ハ長調やイ短調の楽譜を見たり範奏を聴いたりして、楽器で演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 〈関心・意欲・態度〉	視点を与えたり視覚的な資料を提示したりしながら楽曲と出会わせる方法 〈視点2〉 自己の学習状況や課題を明確にする学習カードの活用 〈視点1〉
	5	表現の仕方を工夫して、和音と低音のパートを演奏する。	楽器の音の重なり、和音やその移り変わり、調の違い、音楽の縦と横の関係を聴き取り、その働きが生み	音の実験での演奏を通したイメージや思いの共有化 〈視点2〉

		出す響きのよさを感じ取りながら、楽器の演奏の仕方を工夫して、より美しい響きを自ら求めている。 〈創意工夫〉	演奏を通じた交流の場の設定 〈視点3〉
	6	旋律の重なり方の違いを生かし、各パートのバランスを考えて合奏する。 互いの音を聴き合いながら、和声の響きの違いや旋律の重なり方の違いを生かして、バランスのとれた演奏をしている。 和声の響きの違いや旋律の重なり方の違いを感じ取りながら聴いている。 〈技能〉 〈鑑賞〉	音の実験での演奏を通じたイメージや思いの共有化 〈視点2〉 グループ合奏にて音を通じた交流の場の設定 グループごとの発表の機会や場の工夫 〈視点3〉
三 和 音 の 音 で 旋 律 づ く り 本 時	7	和音に含まれる音を使って、示されたリズムで旋律をつくる。 和音の響きや移り変わりに興味・関心を持ち、和音に含まれる音や与えられたリズムを使って旋律をつくり、反復や変化、音楽の縦と横の関係を生かしてまとまりのある旋律に仕上げる学習に主体的に取り組もうとしている。 〈関心・意欲・態度〉	合唱・合奏で学んだことを生かした指導計画の工夫 〈視点1〉 自他の表現の意図や良さを話し合う等、音を通じた交流の場の設定 〈視点3〉
	8	和音に含まれる音を使って、既習曲に合う旋律をつくる。 和音やその移り変わりを聴き取り、その働きが生み出す響きのよさを感じ取りながら、和音に含まれる音やリズムを使って旋律をつくり、まとまりのある旋律に仕上げることについて見通しをもっている。 〈創意工夫〉	合唱・合奏で学んだことを生かした指導計画の工夫 〈視点1〉 自己の学習状況や課題を明確にする学習カードの活用 〈視点1〉 問いを基に和音の音を使った旋律の有用性に気付かせる工夫 〈視点2〉 自他の表現の意図や良さを話し合う等、音を通じた交流の場の設定 〈視点3〉
	9	つくった旋律と和音伴奏、既習曲を合わせて演奏し、和音の響きやその移り変わりの美しさを味わう。 和音に含まれる音や与えられたリズムを基に即興的に旋律をつくったり、自分なりのまとまりのある旋律をつくったりしている。 和音の響きの違いやその移り変わりの美しさを感じ取りながら聴いている。 〈技能〉 〈鑑賞〉	合唱・合奏で学んだことを生かした指導計画の工夫 〈視点1〉 自己の学習状況や課題を明確にする学習カードの活用 〈視点1〉 自他の表現の意図や良さを話し合う等、音を通じた交流の場の設定 〈視点3〉

4 展開の具体例（9/9時）

○ 学習のねらい

つくった旋律を和音伴奏、既習曲と合わせて演奏し、和音の響きやその移り変わりの美しさを味わうことができる。

主な学習活動 ・ 内容	時間	○教師の支援 ※評価
<p>1 課題をつかむ。</p> <p>(1) 既習曲を歌ったり演奏したりして、学習意欲を高める。</p> <p>(2) 本時のめあてをとらえる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>世界に一つだけの音楽を豊かにする旋律をつくろう。</p> </div>	1 5	<p>○ 学年の歌「翼をください」は毎時間歌う定番曲である。本時も歌い称賛することで、音楽の授業へと気持ちを高めさせていく。 〈視点1〉</p> <p>○ 前時までの学習を振り返り、学習課題につなげる。</p>
<p>2 それぞれ旋律づくりや練習をする。</p> <p>(1) 自分で確認する。</p> <p>(2) 曲ごとのグループで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここは友達と同時に演奏したい。 ・リズムを変えてみよう。 ・拍に合っているかな。 <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  <p>曲ごとのグループでの話し合い</p> </div> <p>(3) 副旋律を練習する。</p> <p>(4) 主旋律に合わせて演奏する。</p>	1 0	<div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  <p>前時・本時で使用した学習カードから</p> </div> <p>○ 自分が使いたい音を選択すると楽譜になる学習カードを活用し、簡単に旋律をつくることのできるようにする。 〈視点1〉</p> <p>○ 人数によるが、一人一小節程度を担当する。学習カードは、いくつかのレベルのものを準備しておき、技術の差を解消させる。</p> <p>○ できた児童からそれぞれ集まり、音を通じた交流の場を設定する。 〈視点3〉</p> <p>○ 創作の枠を超えた旋律づくりをやりたい児童がいた際には、その児童をみんなに紹介し称賛することで、発展的な方法として学級全体へ広げる。</p> <p>※ 和音に含まれる音や与えられたリズムを基に即興的に旋律をつくったり、自分なりのまとまりのある旋律をつくったりしている。(演奏聴取, 学習カード)</p>
<p>3 発表や交流を行う。</p> <p>(1) 各グループの演奏を聴き合い交流する。</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  <p>聴いた感想を交流する児童</p> </div>	1 5	<p>○ 良かったところやアドバイスを交流する際、「どんな演奏か」と問い返し、音に立ち返るよう指導する。 〈視点3〉</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>グループの発表の様子</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>アドバイスし合う児童</p> </div> </div>

<ul style="list-style-type: none"> ・良かったところやアドバイスを交流する。 ・交流したことを生かして演奏する。 	<p>※ 和声の響きの違いやその移り変わりの美しさを感じ取りながら聴いている。（発言内容，行動観察）</p>
<p>(2) 全体で演奏する。</p>	<p>○ 演奏しない方のグループが，主旋律の歌唱や演奏を行い，一つの音楽としてまとめの演奏をする。</p>
<p>4 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 今日学習したことや感想を，自分の言葉で端的に発表させる。</p>
<p>(1) 学んだこと，演奏や本時の友達の良かった所を，発表し合う。</p>	<p>5 ○ 今後の音楽の学習への意欲や，疑問点，友達との学びの良さなどを取り上げる。</p>

5 実践の考察（成果：○ 課題：●）

〈視点1〉学習が深まった子どもの姿を描いた指導計画の工夫

- 自分が使いたい音を選択するだけで楽譜になる学習カードを活用したため，記譜や読譜に不安のある児童も苦手意識をもつこともなく主体的に旋律をつくることができた。
- 本時のねらいは「和音の響きやその移り変わりの美しさを味わう」ことであったが，本時の評価規準は「即興的にまとまりのある旋律をつくる」ことであった。「和音の響き」なのか「旋律を工夫して創る面白さ」なのか，あいまいだった。題材を通して考えると，「和音の響き」を中心に学ばせる必要があった。そのためには，4部音符や8分音符による音楽づくりではなく，2分音符による音楽づくりにすることで和音の響きが生まれ，その響きを聴き合う時間を多く確保することが大切であった。

〈視点2〉音楽表現へのあこがれをもたせ，子どもの思いを高める指導の工夫

- 歌唱教材では，歌詞から情景を考えさせたり3つの画像を提示したりし，器楽教材では範奏を聴き雨のオノマトペを考えさせたことで，視覚・聴覚を駆使した言語活動をもとに曲想や共通事項を引き出し，和音の学習へとつなげていくことができた。
- 本時のめあてを「オリジナルの○○な旋律をつくろう」とし，○○の部分について児童の考えを吸い上げて「面白い・楽しい・美しい」という言葉を付け加えた。和音の響きに注目させたいのであれば「美しい」に絞るなど，ある程度の視点を与えることが重要である。また，授業の途中や終末において，めあてに立ち返らせることで，本時のねらいに迫っていくことが大切である。

〈視点3〉音を通した高め合いの工夫

- 教材と曲想，共通事項との関わりに着目している児童の考えを取り上げたり，ねらいに沿った視点を与えたりすることで，協働した学び合いを通して理解を深めることができた。その際，具体的な音を問い，実演させたり聴かせたりするなど，音を通して感じ取らせたい曲想を意識させることができた。
- 全体だけでなくペアやグループ活動での演奏を通した学び合いを，継続して行ってきたことで，児童は進んで音で聴き合い音で学び合うことができるようになってきた。また，他のグループや全体で，演奏を聴いたり学び合ったりして得たことを，自分の演奏に生かす姿が見られた。

（文責 守谷 千晶）